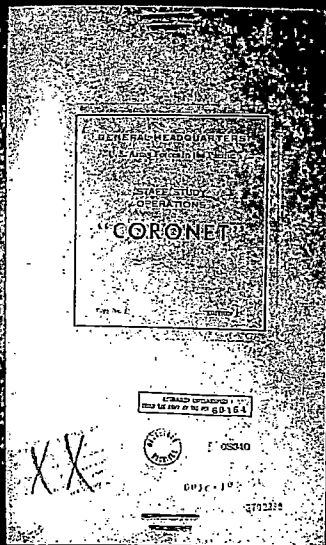


第1章 本土決戦と藤沢



15 米太平洋陸軍『参謀研究 コロネット作戦』(1945年8月作成)

第2次世界大戦(太平洋戦争)末期、アメリカ軍はダグラス・マッカーサー元帥を総司令官とする日本本土への上陸侵攻を計画していた。この日本本土上陸侵攻作戦は、ダウンフォール作戦と呼ばれ、九州上陸作戦であるオリンピック作戦(南九州へ上陸、1945(昭和20)年11月1日発動予定)とコロネット作戦(関東へ上陸、1946年3月1日発動予定)の2作戦からなっていた。

この2つの上陸作戦の重点はコロネット作戦におかれていた。コロネット作戦こそ、「日本に無条件降伏をもたらす」ための「とどめの攻撃」(アイケルバーガー第8軍司令官)だったのである。そして、この「とどめの攻撃」の主上陸地点に想定されたのが他ならぬ湘南海岸、特に藤沢、茅ヶ崎周辺の海岸(米軍名チガサキ・ビーチ)だったのである。しかし、広島、長崎への原爆、ソ連の参戦という事態に直面して日本政府はポツダム宣言受諾を決定する。1945年8月15日、日本は連合国に無条件降伏、湘南海岸は<日本のノルマンディー>となることを免れたのである。

米軍が日本本土侵攻作戦の立案を進めていたころ、日本軍は本土防衛体制の準備に着手していた。45年4月に発令された「決号作戦準備要綱」である。これは日本本土および朝鮮半島を七つの区域に分け、それぞれの防衛作戦を決一号〜七号としたものである。これに動員される兵力は、陸軍315万人(基礎配置:九州方面90万、関東方面95万、朝鮮方面24.7万、決戦時:関東方面128万、九州方面9万)、海軍約150万人であった。

決号作戦のなかで特に重視されたのが、敵主力の上陸が予想され防衛上最重要地区とされたのは首都を含む関東方面を防衛するための「決三号」作戦であった。これを担当したのは第12方面軍で、司令官は田中静壹陸軍大将(東部軍管区司令官兼任)で、日比谷の第一生命ビル内に司令部が置かれた。第12方面軍は関東7県(長野県の一部を除く)、山梨県・新潟県及び静岡県の一部(概ね富士川以東)という広大な地域を作戦区域とし、ここに進攻する敵をその上陸初頭において撃滅することを任務とした。

第12方面軍は、米軍の計画案と異なり敵侵攻の主力は九十九里方面を第一の正面とし、湘南・相模湾方面を「二義的な正面」とし、軽視していた。そのためこの方面に配備された第53軍(高座郡相模原の相武台の陸軍士官学校に軍司令部、通称「断部隊」)は、当初第84師団(司令部小田原)と第140師団(片瀬町)の2箇師団であった。しかし、第53軍司令官赤柴八重蔵中将は敵侵攻を相模湾と予測し、相模川を挟む中央部に新たに第316師団を設置するとともに海岸から1000メートルまでの汀線附近に陣地構築を命令し、「水際撃滅」の体制をとった。

プロローグ

高度10,000メートル 眼下の藤沢

太平洋戦争勃発の翌年（1942年）の4月18日、ドーリットル中佐を指揮官とするアメリカ陸軍航空部隊のB25双発爆撃機16機が太平洋上の空母ホーネットから発進、東京、名古屋、神戸に対する爆撃（目標は主として軍需工場）を決行した。日本の都市が被った最初の空襲である。だが、それは単なる序章に過ぎなかった。

1944（昭和19）年初頭、米陸軍戦略空軍は、大型爆撃機B29を開発した。この年の6月14日には、早くもこの「超・空の要塞」は日本上空に姿を現した。中国の成都から飛び立った戦略空軍第20航空軍（日本爆撃を担当）のB29数十機が、福岡県八幡市（現、北九州市）の日本製鉄八幡工場を爆撃したのである。さらに11月24日、B29の編隊が東京に飛来、中島飛行機武蔵工場を爆撃した。実に2年半ぶりの米軍機による東京爆撃であった。以来、B29は毎日のように関東地方のどこかに姿を現すようになった。

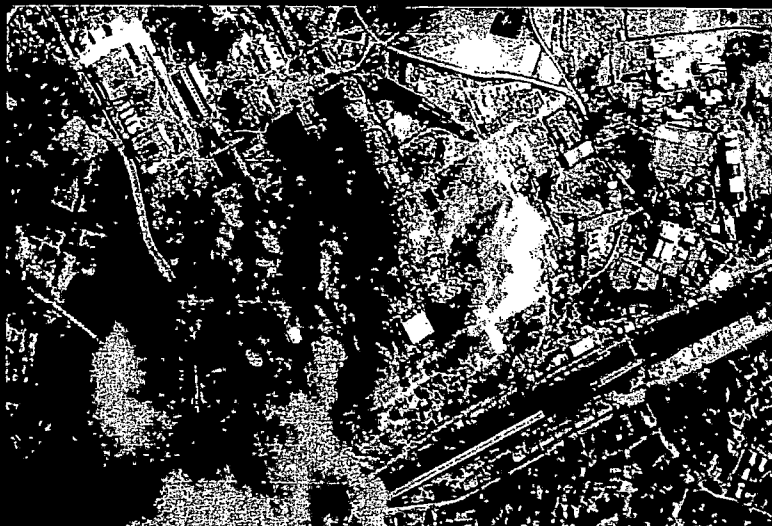
当初、B29部隊（第20航空軍）が実施していたのは、兵器工場などの軍需施設に対する精密爆撃であった。しかし、1945年2月、第20航空軍は、都市自体を広範囲に渡って爆撃する無差別戦略爆撃に方針を転換する。その最大のねらいは、日本国民の間に厭戦気分を醸成することにあった。

1945年3月10日未明、マリアナ諸島の基地を飛び立った数百機のB29が東京に対する無差別爆撃（住

宅地をも攻撃）を実施し、無数の焼夷弾を投下、東京の中心部（約42平方キロ）は焼け野原となった。以後、6月半ばまで大都市地域に対する焼夷弾無差別爆撃は続けられ、神奈川県においても、3月10日と5月29日には横浜市が、4月15日には川崎市が大都市無差別焼夷弾爆撃の目標とされ、多数の人命が失われた。

1945年の半ばを過ぎると、無差別爆撃の対象は地方都市にも拡大され、7月16日には、海軍火薬廠等多く軍需施設を抱えた湘南の軍都平塚市が、B29の空襲を受け300人以上の人々が犠牲となった。

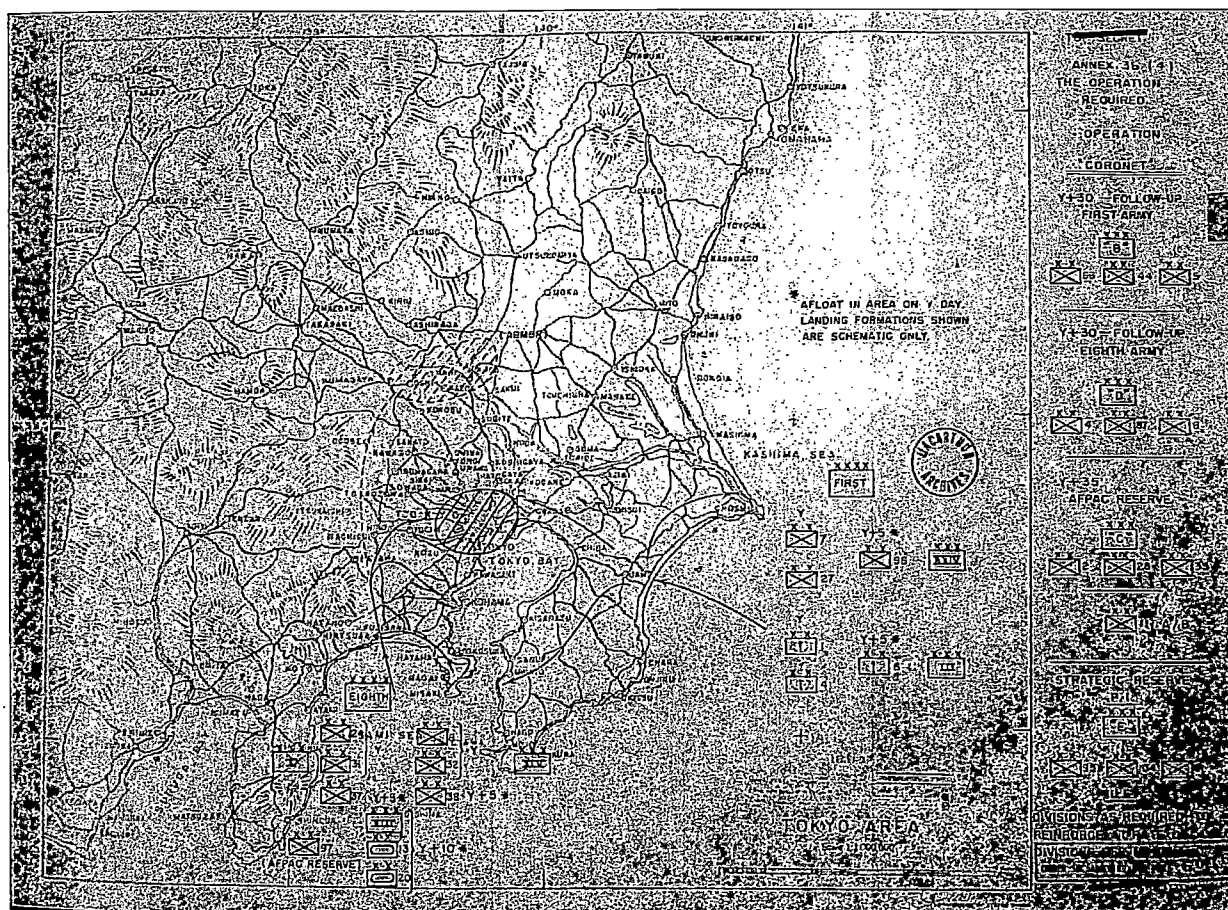
空襲の被害は、B29のみによってもたらされたものだけではなかった。日本近海にまで進出した米空母から発進した米海軍艦載機による機銃掃射や爆撃による被害もあったのである。1945年2月16日から17日にかけて、米海軍機動部隊は、艦載機による関東全域の軍需施設に対する空襲を行った。この時、艦載機は、湘南地方にも飛来、藤沢や茅ヶ崎に対しても機銃掃射などによる空襲を実施した。その後、艦載機は、しばしば湘南上空に飛来、機銃掃射や軍需施設に対する爆撃攻撃を実施する。7月30日、住友特殊製鋼（現、住友特殊製鋼）本社工場が機銃掃射と爆撃を受け、工場施設は壊滅的な打撃を受け、従業員5名が犠牲となった。そしてこの時の空襲が、藤沢市が被った最大規模の空爆であった。



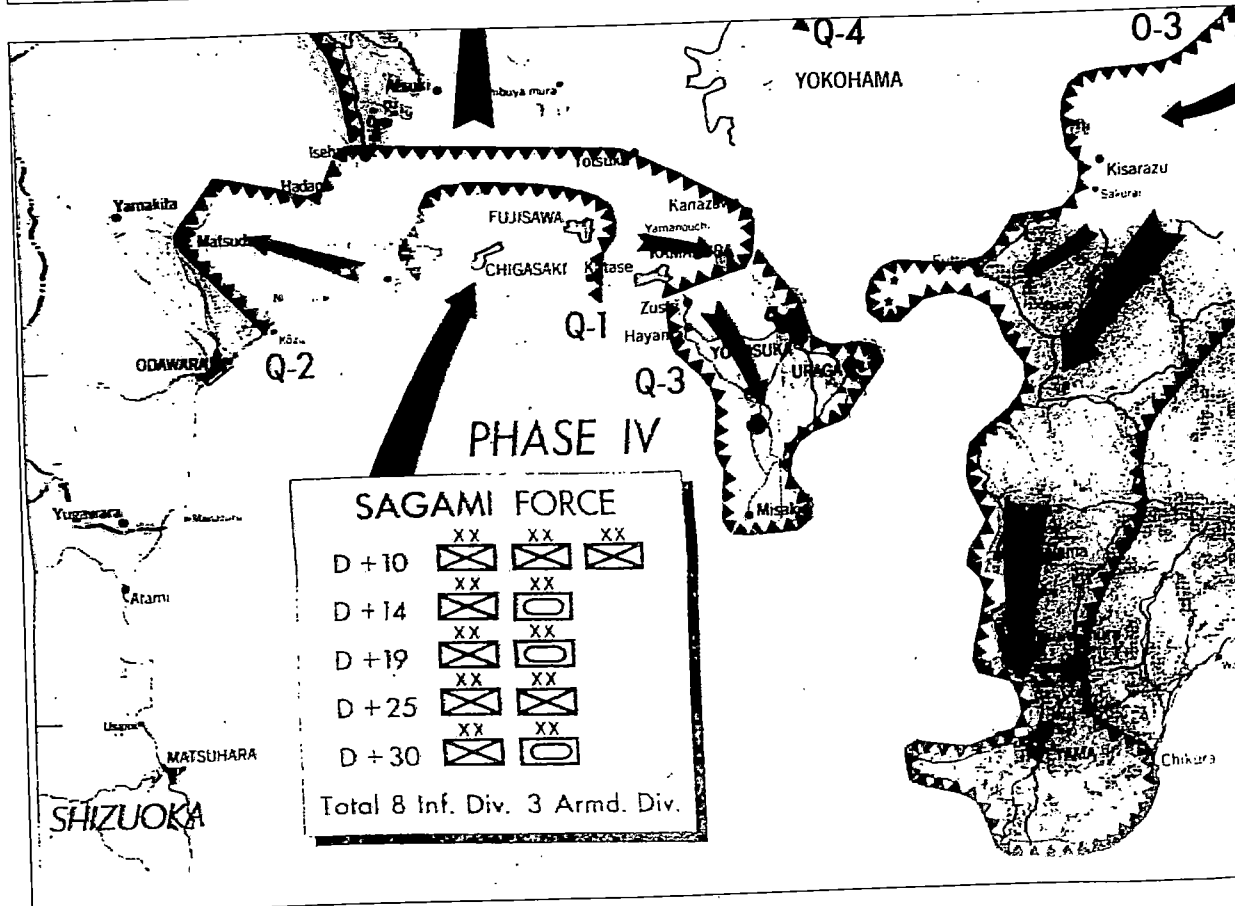
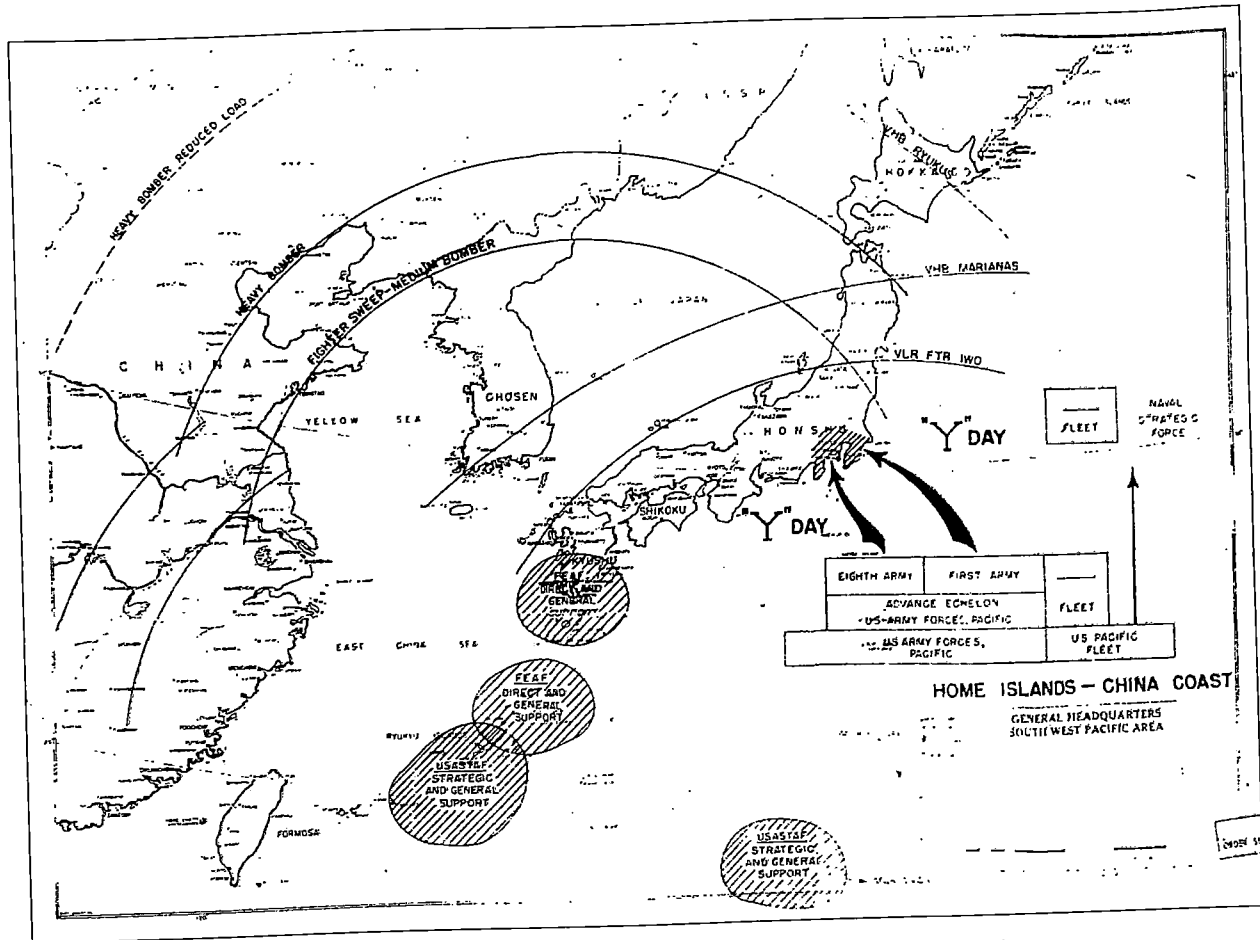
1 米艦載機の爆撃により炎上する住友特殊製鋼（現、住友特殊製鋼）本社工場（1945年7月30日）

コロネット作戦

コロネット作戦には、太平洋陸軍（総司令官ダグラス・マッカーサー）の『参謀研究 コロネット作戦』のほか、統合戦争計画委員会の『関東（東京）平野侵攻概略プラン』など数種類の作戦計画が存在する。動員兵力、上陸後の展開等においては諸計画案の間かなりの相違があるが、主上陸地点を湘南海岸、特に藤沢、茅ヶ崎周辺としている点においては一致している。ちなみに『参謀研究 コロネット作戦』では、1946年3月の段階で湘南海岸に上陸する部隊数は、7個歩兵師団、2機甲師団（第8軍）、兵員数は上陸作戦日（3月1日）だけで約30万人であった。



18 米太平洋陸軍の上陸作戦図（『参謀研究コロネット作戦』より）



- 16 関東地方への侵攻ルート（『参謀研究 コロネット作戦』より）
- 17 米統合参謀本部統合戦争計画委員会の上陸作戦図（『関東（東京）平野侵攻概略プラン』[1945年5月作成]より）

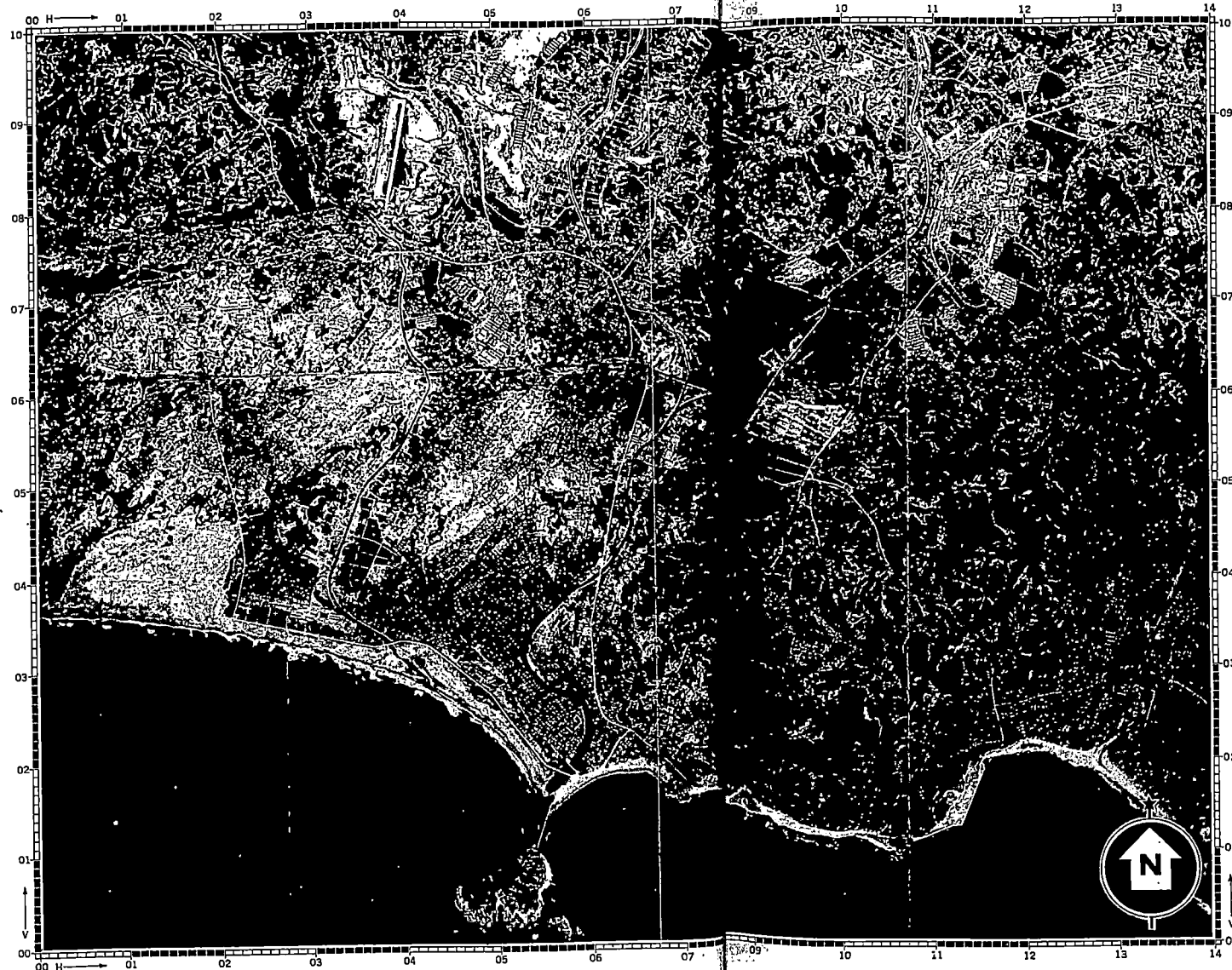
JOINT
TARGET
GROUP
WASHINGTON D.C.

FUJI AIRCRAFT, OFU
OFUNA

0 2000 4000
0 1/2
1:32 000 APPROX.

RESTRICTED

SHEET90:17-2033 P1
DATE 28 April 1945
TARGET90:17-2033
COORDINATES...35°20'N 139°32'E
PHOTOGRAPHED...11 February 1945



PUBLISHED IN OFFICE OF A&AS INTELLIGENCE, AAF, BY COMBINED PERSONNEL
OF UNITED STATES AND BRITISH SERVICES FOR THE USE OF ALLIED FORCES.

RESTRICTED

File No. 543,033.52

2 米軍偵察機が撮影した湘南海岸
(1945年2月11日)

米軍は、空母艦載機や偵察機に改造されたB29による極めて精巧な空中撮影を行った。空撮された写真は、統合目標設定委員会などに回され、爆撃目標設定の貴重な資料となった。